

## 平成 30 年度自治医科大学大学院看護学研究科 F D 活動のまとめ

### I. 平成 30 年度 科目責任者による授業改善の取り組み

#### 1. 博士前期課程

##### 1) 共通科目

科目名	科目責任者	授業改善の取り組み
看護管理・政策論	春山 早苗	無記名による自作の授業評価票により評価した。項目は「①必修科目であることの意義が理解できたか」「②授業内容及び授業スケジュールへの意見・要望」「③授業全般の感想」とした。①については回答者全員が「はい」と回答した。複数の講師、ディスカッションが多いこと、土曜日の集中的な講義であることが好評であった。一方で、教室の環境、課題の提示時期や相談体制に関する要望があった。これらの評価結果に基づき、次年度の授業改善内容を検討した。
病態生理学特論	倉科 智行	各回の講義で学習する症候について、学生のこれまでの経験から興味のある分野を深く掘り下げることで、学生の主体的な取り組みがなされた。数回ごとに口頭で授業内容や進め方について聞き取りを行い、授業内容の改善を適宜行った。最終回に学生の自由意見を聞き、内容で次年度の授業内容の見直しに活かした。
フィジカルアセスメント特論	村上 礼子	受講生の専攻分野を勘案して、非常勤講師と講義・演習の内容の洗練を依頼した。適宜、講義・演習内容や進め方、高度看護実践への応用性などについて、意見や要望を聴取した。出された意見などは非常勤講師にも共有し、次年度の授業改善に向けて検討した。昨年度から取り入れた模擬患者の診察の演習は、それまでの学習成果を学生が自己評価することもでき、効果的であったため、今後も継続していく。
臨床薬理学特論	大塚 公一郎	各回の授業終了後に担当教員から意見を聞くとともに、学生より授業に対する感想・意見・要望等を聴取し、次年度の授業改善に努めた。
看護実践研究論	半澤 節子	未開講
コンサルテーション論	永井 優子	履修者数が 6 名と比較的多かったので、分担の調整が円滑にでき、学修上の負担が軽減できた。また、出産のために 4 月中欠席していた学生に対しては、同領域所属の学生がサポートをしていたため、特別の配慮を必要としなかった。 例年通り、非常勤講師とは授業資料等について共有するとともに、担当回終了後には学生の反応と今後の対応についてともに検討した。また、毎回の授業終了時に学生からの質問を確認して、最終レポートにおける学び等を確認し、次年度以降の授業改善に活かした。
看護倫理	小原 泉	科目の到達目標を学生に十分に説明し、特に演習部分で学生が到達目標を理解して課題に取り組めるよう留意した。学生の反応に合わせて演習でのディスカッションテーマを柔軟に調整し、非常勤講師とも随時情報を交換して、学修課題の達成に努めた。各回の授業の際に学生の意見・感想を聞き、講義の理解度、演習課題の難易度や取り組み状況、有用性や満足度を確認して授業改善に努めた。
看護継続教育論	本田 芳香	各科目担当者は、開講 2 カ月前に、授業で課す内容及び評価方法を記した学習課題を提示し、科目に取り組む準備時間を十分確保した。各授業終了後、学生の理解度や取り組む状況などの意見や感想をきき授業改善に反映できるように努めた。科目終了後、科目担当者間で評価内容より、科目の達成度について意見交換をし、次年度の授業改善に向けて検討した。

地域医療論	春山 早苗	最終回に学生から授業内容や授業の進め方などについて意見や要望を聴取した。その結果に基づき、次年度の本科目担当教員の担当回とその内容等を検討した。
地域調査法	春山 早苗	最終回に学生から授業内容や授業の進め方などについて意見や要望を聴取した。演習も交えた量的データのまとめ方および質的研究方法、ディベートによる研究論文のクリティークという授業構成と授業内容・方法は好評であった。これらの結果に基づき、次年度も同様に授業を実施していく。
Academic Writing& Oral Presentation	成田 伸	自治医大シンポジウム、EAFONS における英文での投稿・発表を目指し、パラグラフライティング、スライドプレゼンテーションについて演習的に取り組み、その後文献・自己の研究を用いてプレゼンテーション及びディスカッションを重ねた。前年度に EAFONS で発表した学生に講義内でサンプルプレゼンテーションしてもらい、実践的な学びとなるよう配慮した。受講者のうち 1 名が EAFONS で発表した。受講者からは、学会への登録に間に合うように、開講時期を早めて欲しいとの要望が強く、次年度は開始時期を早める予定である。

## 2) 専門科目

領域	科目責任者	授業改善の取り組み
小児看護学	横山 由美	授業の進捗について学生に確認しながら進めた。また、学生からは授業の途中および最終授業終了後に感想や意見、学びについての課題を確認し、非常勤講師からは学生の学びの評価や授業の改善点などを確認して、次年度の授業改善を検討した。
母性看護学	成田 伸 野々山 未希子	3 名に対して 1 年次の科目を教授した。CNS38 単位の教育課程のため、院生の学習状況・評価・感想を適宜確認しながら、課題が過重にならないように、調整を行いながら進めてきた。次年度以降の改善に向けて検討を重ねている。
クリティカルケア看護学	佐藤 幹代	高度実践看護教育課程における専門看護実習では、到達目標や運用方法について学生からの意見や要望を確認し、また実習指導者と振り返りを行い、学生に適したより良い教授方法を検討し改善に務めた。
精神看護学	半澤 節子 永井 優子	院生の進捗状況を確認しながら、必要な助言を行った。また、院生から研究指導に対する意見や要望を適宜確認しながら、指導内容を工夫した。
がん看護学	本田 芳香 小原 泉	専門看護実習では、事前実習を 1 週間設け、実習内容及び達成度をイメージできるように努めた。実習指導者と密に連携し、学生の実習目標の達成状況に応じて指導方法の検討を行った。
地域看護管理学	春山 早苗 塚本 友栄	今年度開講した科目について、学習目標の達成状況および担当教員の意見ならびに学生の意見・感想を踏まえ、次年度の授業改善に向けて検討した。
看護技術開発学	村上 礼子	学生の理解度を確認しながら指導を行うように努めた。また、多くの教員からの助言がもらえるようゼミ形式での授業を多く設定した。研究指導に対する意見や要望を聴取し、学習目標の達成度について担当教員間で意見交換を行いつつ、次年度の授業改善に向けて検討した。
老年看護管理学		未開講

## 2. 博士後期課程

### 1) 専門関連科目

科目名	科目責任者	授業改善の取り組み
異文化精神医療論	大塚 公一郎	少人数の聴講学生であることを活かし、学生の理解度、進捗状況を確認するための、質問を教員、学生の双方向から行い、学生の理解度を何度も確認しながら、授業を行い、補足資料も臨機応変に提供した。
地域保健医療研究論	春山 早苗	未開講

### 2) 専門科目

科目名	科目責任者	授業改善の取り組み
広域実践看護学特論Ⅰ ヘルスケアシステム研究法	春山 早苗	最終回において学生より授業への意見等を聴取した。これに学生の課題への取り組み状況および学習目標の達成状況を加えて、担当教員間で話し合い、次年度の授業改善に向けて検討した。
広域実践看護学特論Ⅱ クリニカルケア研究法	横山 由美	教員間で学生の学びの状態を確認し、必要時授業内容を調整していった。学生には最終日に感想と学んだ内容について聴取した。
広域実践看護学特論Ⅲ メンタルヘルス研究法	半澤 節子	未開講
広域実践看護学特論Ⅳ 看護教育・管理研究法	本田 芳香	未開講
広域実践看護学演習 〈ヘルスケアシステム〉 〈クリニカルケア〉 〈看護教育・看護管理〉	半澤 節子	学生が選択したテーマを担当する教員と院生とで必要な連絡がとれるよう入学時オリエンテーションなどを工夫し、担当する教員が院生の進行状況に沿った助言ができるようにした。また、合同研究セミナーでの発表から研究の進捗状況を把握し、担当教員間で情報交換に努めた。
広域実践看護学特別研究	春山 早苗	研究科長として、今年度の修了生に研究活動や研究指導の感想・意見を聞き、次年度の研究指導の改善に向けて検討した。主研究指導教員として担当の学生へは、研究の進捗状況に応じて学生と指導時期を話し合い、個別指導と副研究指導教員も交えた指導を組み合わせ、合同研究セミナーで得た意見も参考に指導している。また、副研究指導教員として担当の学生へ合同研究セミナーの機会や主研究指導教員らとともに指導している。
	成田 伸	面談での個別指導およびメールのやり取りを通じて、受講生の進捗状況を把握し、副研究指導教員からの意見や合同研究セミナーでのコメントも活かして、研究指導に反映した。また学生が多様な場で学べるように、人との出会いの場を設定し、研究会への参加を促した。一人は研究計画書立案を終え、研究計画審査会の承認を得ることができ、もう一人も研究構想を固めることができた。
	小原 泉	研究の進捗状況に合わせて個別指導の時間を設け、学生の主体性を尊重しつつも、学位論文として求められる到達レベルを学生に示しながら指導を進めた。主研究指導教員だけではなく、学生の研究課題や用いている研究手法に精通した教員からも指導の機会が得られるよう調整した。

	半澤 節子	学生とのメールでの情報交換から、学生のワークライフバランス、進捗状況を適宜把握しながら、学生が主体的に取り組めるよう教授方法を工夫した。
	横山 由美	個別指導により学生の考えを把握し、学生の研究の進捗状況に合わせられるよう学生との面接を短期間のインターバルで行った。合同研究セミナーおよび小児看護学に関わる教員・院生から意見をもらい、修正方向を検討していった。

## II. 看護学研究科担当教員間の評価

平成 30 年度は実施しなかった。

## III. 研究科長と大学院生との懇談会

年 2 回、講義・演習、研究指導、及び学習環境について大学院生に意見を聞き、必要な対応を行った。

### 1. 第 1 回懇談会

- 1) 実施日時：平成 30 年 9 月 18 日（火）17:00～18:00
- 2) 実施場所：会議室
- 3) 参加者：前期課程学生 1 年 7 名（2 名欠席）、2 年 7 名  
後期課程院生 1 年 0 名（2 名欠席）、2 年 0 名（2 名欠席）、3 年 1 名（5 名欠席）計 15 名
- 4) 学生からの学習や学生生活についての感想

<前期課程>

1 年前期は共通科目と専門科目で怒涛のように過ぎ、研究について考える余裕がなかったので、これから頑張りたい、1 年前期は大学院における学習や生活環境の変化になれるのに精一杯だった、専門看護師を目指す学生と学習することにより視野が広がる、演習科目については、専門看護師の実践に刺激を受けた、演習科目により視野が広がった、様々な施設で演習したことは即、実践に役立つ、専門看護実習をしながら倫理審査委員会へのコメントに対応することが大変であった、特別講義として開催された「質的データ分析法 SCAT セミナー・ワークショップ」は、質的研究の理解が深まり、またグループワークもあって楽しくよかったなどの感想が挙げられた。

<後期課程>

特になし

### 5) 学生からの意見・要望

#### (1) 学習環境について

使用しているノートパソコンが現存する中では最も古く、頻繁に不具合を起こし、看護学務課の職員にその度にご足労をかけている、使用しているパソコンの液晶が暗い、打てないキーがある→パソコンがどうにかならないかなどが挙げられた。

#### (2) その他

研究についてオプトアウトとする場合の対応方法（ホームページに掲載する手順等）について、十分に周知してほしいなどが挙げられた。

### 2. 第 2 回懇談会

- 1) 実施日時：平成 31 年 2 月 27 日（水）17:00～18:00
- 2) 実施場所：会議室
- 3) 参加者：前期課程学生 5 名、後期課程学生 0 名（1 名欠席）計 5 名
- 4) 学生からの学習や学生生活についての感想

<前期課程>

履修方法では、科目等履修は大学院での学習の雰囲気を知ることができる、科目等履修の単位があることで 1 年前期は余裕があった、長期履修制度を利用していたが、夜間や土曜日にも授業が行われ、学習がしやすかった等の意見が聞かれた。

指導教授等との教育体制に関しては、指導教授が変わることは、少し戸惑いがあった／大変だった、指導教授等の関わりをとおして、社会人としての立ち居振る舞いを学ぶことができた、学生への関わり方や講義の組立て方等教育力も高めることができた、教員に支えられた、教員と出会えたことがよかったなどの感想が多くあった。

演習・実習、ゼミに関しては、所属施設で働いているだけでは見えない他の施設や機関の動き等を理解することができた、CNSが多い実習施設で指導が得られてよかった、同級生が複数いて、授業の後に学生同士で振り返りができよかった。先輩や後輩と研究等についてディスカッションし、視野を広げられたことがよかった、同級生や同じ領域の修了生と出会えたことがよかった等の感想が挙げられた。

研究指導に関しては、研究計画支援委員会への研究計画書の提出や倫理審査申請とCNSの実習が重なり大変だったので、実習の前に研究計画書を提出した方が実習に専念できると思う、頭の切り替えが難しかった、学位論文提出後から学位論文発表会までの流れ、具体的には論文を修正するタイミング等がよくわからなかったなどの意見が挙げられていた。

#### 5) 学生からの意見・要望

##### (1) 学習環境について

研究室がとても乾燥していて加湿器があるとよい、学位申請に関わる書類について、看護学務課のホームページに古い様式が載っていたため、改善してほしいなどが挙げられていた。

##### (2) その他

研究方法の学習がより深められるとよかった、質的研究に取り組む学生が多いが、量的研究について学ぶ機会があるとより良いと思うし、量的研究に取り組む学生がもっといてもよいのではないかと思ったなどが挙げられていた。

## IV. 大学院看護学研究科FD研究会の実施

### 1. 目的

大学院教員の研究指導力を高める一環として、質的研究ならびに質的データ分析法 SCAT を理解し、研究手法として活かすことができる。

### 2. 目標

- 1) 質的研究ならびに質的データ分析法 SCAT について知る
- 2) 質的データ分析法 SCAT の分析方法および活用について知る

### 3. 日時・場所

#### 1) 質的研究に関するセミナー・ワークショップー

2018年8月6日(月) 9時~18時 自治医科大学看護学部内 午前:大教室IV、午後:学習室

#### 2) 質的データ分析法 SCAT セミナー・ワークショップー

2018年9月7日(金) 9時~18時 自治医科大学看護学部内 午前:大教室IV、午後:学習室

2018年9月8日(土) 9時~18時 自治医科大学看護学部内学習室

### 4. 内容

<講師>

名古屋大学大学院教育発達科学研究科 大谷 尚教授

質的研究者として質的な医療専門職教育と臨床研究、大学院の指導生である多くの医療専門職の質的研究に携わってこられた。質的データの分析方法として、SCAT(Steps for Coding and Theorization)を開発者である。

#### 1) 質的研究に関するセミナー・ワークショップー

##### (1) スケジュール

9:00-12:00 ①質的研究と研究プロトコル(研究計画)のセミナー

- ・質的研究に関する講義
- ・質的プロトコル(研究計画)の書き方について

- 12:00-13:00 グループ分け、昼食  
13:00-17:00 ②質的研究のための研究プロトコル(研究計画)ワークショップ  
・プロトコル作成作業  
・各グループからの発表と質疑応答  
17:00-18:00 事前アンケートにおける質問への講師からの回答

(2) 参加者

- ①質的研究と研究プロトコル(研究計画)のセミナー:50名  
内訳;大学院担当教員18名、大学院担当以外の教員7名、院生24名、他  
②研究のための研究プロトコル(研究計画)ワークショップ:30名  
内訳;大学院担当教員8名、大学院担当以外の教員4名、院生17名、他1名

2) 質的データ分析法 SCAT セミナー・ワークショップ

(1) スケジュール:

【1日目(9月7日)】

- 9:00-11:30 ①質的研究に関する講義  
11:30-12:00 ②SCATに関する講義  
12:00-12:45 昼食  
12:45-18:00 ③SCATによる分析作業

【2日目(9月8日)】

- 9:00-12:00 ③SCATによる分析作業  
12:00-12:45 昼食  
12:45-15:30 ③SCATによる分析作業  
15:30-17:00 ④各グループからの発表と相互評価  
17:00-18:00 事前アンケートにおける質問への講師からの回答

(2) 参加者

- ①質的研究に関する講義:29名  
内訳;大学院担当教員8名、大学院担当以外の教員8名、院生13名  
②③SCAT講義・ワークショップ:26名  
内訳;大学院担当教員7名、大学院担当以外の教員5名、院生13名、他1名

3) アンケート結果

- (1) アンケート配付数33 アンケート回収数19 (回収率57%)  
(2) アンケート回答者の概要  
大学院担当教員3名、大学院担当以外の教員5名、院生11名  
(3) 質問記述内容(大学院担当教員の回のみ抜粋)

【問1 研究会の内容を、今後の自信の教育研究活動にどのように取り入れようと考えているか】

- ・量的研究方法を通常は選択しています。質的研究を今後実施する機会があれば本研究会で学んだ内容をもとに正しい方法で実施したい。
- ・自身が行っているFDに今回学んだことを活かしたいと考えている。
- ・ぜひ一度使ってみたい。過去に行った質的研究の生データをもう一度SCATで分析して違いを実際に確認したい。

【問2 今後取り上げてほしいテーマや希望】

- ・パラダイムの理解を深められる勉強会

## V. 意見箱について

投稿された意見はなかった。